

巻頭言

今日、多くの科学分野で学際的な取り組みが見られるようになってきた。従来の縦割り分野内でのサイエンスの展開に閉塞感や限界を感じている業界が少なくないことや、何か新しいことをやれという暗黙の圧力も背景にあるのかもしれない。ともあれ、こうした試みは大いに結構なことだと思う。同じ科学とはいえ、分野が違えば常識とされていることや、研究の作法がかなり異なることがあり驚くことが少なくない。この驚きこそが学際的研究を成功に導く発端になるのだと思う。

“学際的”という言葉は広い意味を持っているようで、例えば、様々な分野の研究者が、あるキーワードのもとに一堂に会する研究会は学際的研究会と位置づけられる。最近こういった研究会が盛んに行われている。しかし、なかには主催者の意図とは裏腹に、それぞれの分野の研究者が歩み寄ることなく、ほとんど何の驚きも感じていない体で終了してしまう残念な研究会もある。話者は自分の研究の意義を他分野の人にも分かってもらおうという積極的な姿勢が大切であり、聞き手は、専門外の研究と自分たちの接点を見いだす努力が必要である。何より大切なのは、自らの分野の価値観にとらわれずに異なる分野の科学を楽しむ余裕である。これは研究会に限らず学際的研究一般にあてはまる。学際的な取り組みの成功は、単に他分野の研究者を寄せ集めることでは生まれない。一人一人の研究者が学際的になる、つまり様々な価値観から研究を展開できることが重要であると思うが、こうした余裕がなければ成功は難しい。学際的な取り組みは決して簡単ではないが、多くの科学分野に大きな発展をもたらす可能性があると思う。

惑星科学はそれ自体学際的な学問分野と言えるが、その発展にはまだまだ他分野の力を借りる必要があるように思う。プロジェクトに関わる研究では強い結びつきで皆同じ目標に向かう必要があるが、いっぽうで、学会としては様々な価値観の研究者が緩く結びつき、多くの分野の研究者が心地よくいられる学会であって欲しい。

渡部 直樹(北海道大学低温科学研究所)